

講義レジュメ

講 師 伊達元成(だて歴史文化ミュージアム)

内容・テーマ

文化を創る装置としての博物館、市民がそれを使いこなすために学芸員にできること

期 日 令和元年 12 月 12 日

平成 31 年 4 月、北海道伊達市にオープンした「だて歴史文化ミュージアム」は、実施設計以前から、市民にとっての「理想の博物館」がどのようなものを官民共同で検討してできた検討材料（提言書として市に提出した）を元に、新しく建てられたミュージアムです。

新館建設の背景には、伊達市が取り組むまちづくりの将来像として「第 6 次伊達市総合計画」（平成 21 年 3 月）を策定し、「食」「教育」「生きがい」「環境」の 4 項目を戦略的・横断的政策の重点政策として掲げています。しかし老朽化した旧展示施設では、先に示した上位計画から見た事業が満足に展開できず、地域特性を活かした「教育」、また健康で社会に参加する喜びと「生きがい」を創出する「場」として活用するには限界を超えていました。

そこで私たちは博物館づくりに興味のある市民を募り、毎月 1、2 回集まっては、地元に着した要素を多くつぎ込んだイベントを計画し、それを実施しました。会の活動そのものを官民協働のイベントとして、さまざまな企画を実施したのです。

この活動で得られた意見は、提言書という形で伊達市に提出されました。内容は、施設の老朽化により文化財の活用が沈滞化している現状が問題であるとし、「市民の知的ニーズを満たし、市民が主体となって文化活動を展開できる核になる施設を考えるべき」としました。

平成 26 年に外部有識者を交えた検討委員会が設置され、市民からの提言書をもとに新館のあるべき方針を①公開承認施設の条件に叶う設計を行うこと。②伊達市ならではの歴史・文化を尊重して、それらの魅力を発信する展示とすること。③市民が博物館活動に参加できる仕組みを作ること、としました。これらを実現するために、博物館の基本設計がまとめられ、平成 27 年からの実施設計を経て工事が着工し、平成 31 年に完成したのです。

一方、私たちは一連の市民活動をサポートするだけでなく、適宜最新の歴史研究や博物館研究の情報をその活動に注入していきました。学芸員はサポーターであると同時に、自らを研究の最先端に身を置きつつ最新の情報を提供するかたちで活動に参加しました。

たとえば、考古学の調査や文献史学の研究により、市民のアイヌ文化への意識が少しずつ変わってきました。そして北海道開拓史観から脱却が図られ、展示場が和人中心の展示から、多文化の重層を主とする大胆なデザインになったのです。

学芸員が積極的に研究成果を博物館活動に還元することで、市民もまた展示を通して研究活動に参加できるようになった、そして参加する「場」としての博物館が完成したのです。

〔参考文献〕

噴火湾文化 Vol.13(2019.3)伊達市噴火湾文化研究所

伊達元成,博物館の空間に込められた文化創造のプロセス—だて歴史文化ミュージアムのデザイン—,全日本博物館学会第 45 回研究大会(2019)